

報



會

1964年8月

234

日本山岳会

山で会った人(三)

松方三郎

吉田の六合目の上から須走にぬけるお中道の分岐目は、いついっても見返してしまおう。行きすぎたから振返って探すのはいつものことだが、その夕方、この辺だったなあと話しながら、うっかりと過ぎてしまった。

ちょうどそのあたりであった。

二十人近い登山者が、一本のザイルを手にもって、足をそろえて登っているのである。先頭の人がしきりと、声をはげましながら、オイッチ・ニイ、オイッチ・ニイと調子をとっている。一見むかひが山を登っているようなその光景は、富士には珍しいものだった。よくみると綱の真中あたりにも、尻尾にも、オイッチ・ニイがいる。むかひの方には黒い眼鏡をかけた人もちらほら見える。とにかく異様なのである。まだ足下も明るい、なだらかな砂道を綱引きみたいに行きながら、誰が見ても異様だと思ふのである。

しかし暫くみているうちに、そのザイルをはさんで登っていく人達が目に見えない人達だということに気がついた。まさかそんな人達が富士に来ていると思ひもしなかつた。

つたから、頭がそこいかなかったのだが、正に盲人団の富士登山なのである。ぼく達は、標を正す思いで、あらためて一行を眺めた。

七合に取りつければ、八合までは小屋から小屋への階段みたいな登りだが、その中だつて、うっかりしていると本道を外れそうになることもあつたし、ちよつと迂回するような岩場もないではない。

そんなところで、脚を奇妙にくねらせて登っていく人がいた。脚をどうかしっているのかと思つたら、つまり小兒麻痺の人だつた。その自由にならない脚をくねらせながら、たった一人で頑張っているのである。見ていて心が配て手を貸そうかと考えてみたり、杖をあげましようかなどと口に出かかると、あつた。しかし一人で頑張っているのに余計なことをいうのはどうか、と考えて、黙っておきよけていったのだつたが、ほんとに、余計なことをいふたりしなくてよかったと、あとで冷汗の出る思ひだつた。

こうしてぼく達は、とつぱり日の暮れた八合の常宿に入ったのだが、小屋は満員で、ぼく達は帳場の

のうらにもぐりこむ始末だつた。その間にも奇妙な光景をいくつかみた。

うどんを注文した人が、うどんをたべるのを見ると、片手のない人だつたり、介添の若い人が飛んでいて、抱きかかえるようにして小屋につれてきた人が、ものの言えない人だつたり。

その辺になって、ぼく達も、これは何かだな、とうとう不思議に思つて来た。随分ぶい話だが、別段酸素の不足が血の循環に影響を与えたのだとは思われない。

話をきいてはびっくりしたこと、その日は山梨県の身体障害者の団体が富士登山をやっているのであつた。そうきけば奇妙な光景の謎は一挙に解けるのだが、そうきいてみると、あらためて、そんな計画をたてた人に頭が下がる思いがするであつた。

身体障害という事実からくるコムプレックスを一通するに、富士登山とは、何という素晴らしい考えだろう。富士は日本人なら誰でも一度は登る。つまり、足腰の一人前の人間であることを証明する一つの試金石だ。それに挑み、それにうちかとうという気魄と、それをさせようとする人達の愛情とは打たれざるをえないのであつた。

愛情といったが、この場合は生易さしいものではない。世話をしている人達の中には、看護婦らし

い若い婦人もいるのだが、その人達がかいがいしく、山の上を飛び歩きながら世話をしているのだ。大変な労働。ぼく達はほれほれする気持ちで、そうした人達を眺めたのだ。

夜はガスが深く、さすがに冷え冷えとして来た。

思ひは自然、追いついて来た人達の上にあつた。この時間になつてもまだ着いていない、暗くなつて来たが大丈夫だろうか、などと話合つたのだつたが、暫くしてから、あの人は、日が暮れたって、暗くなつたって平気なんだなと気がついた。まことに我ながら間の抜けた話である。

帳場のうらに埋没していたので、翌朝一行が出ていったころは、何も知らずにねていたが、後から聞けば、どうやら無事頂上ということであつたらしい。

今年は、もっと大々的な計画があつた。皇居前に集合して、山では自衛隊が出動などという大がかりの話だつた。頂上に登る一行をテレビでも見た。ぼくはさそれたが、その方はご免をこうむつた。用事があつたからでもあり、それに、何となく一年前の清々しい印象を大切にしておきたかつたからでもある。

お知らせ

ルーム移転に際しまして何かとご不便をおかけして居りましたが、このたび諸設備も整いました。

マナスルの西藏名と サマの人達

吉 沢 一 郎

◇ヒマラヤの巡礼

最近、私は David Snellgrove の『Himalayan Pilgrimage(1961)』を読んだ。著者が西藏仏教の優れた学者であるらしいことは、門外漢の私にも、この本でよくわかった。西藏国境に近い北ネパールの、山奥の廟の中に祭られている、いろいろの仏像、仏画の名前が、英語と西藏語綴りで沢山出てくるが、私には全然チンプン・漢文である。従ってこれを読破するにはかなりの努力を要したが、それだけの価値は充分にあった。若しこれを読みこなそうと思つたら、日本語では、青木文教師あたりの諸著作をじっくり研究しておくことが必要である。

◇マナスルの山名

マナスルはサンスクリット語の

Manasa (靈魂) と関係があるといわれているが、日本隊が探してきた西藏名は Kang Bungen (氷の肩) である。ところがスネルグロヴの解釈によると、西藏語では dpung-brgyen (ブン・ギエンと読む) となり、意味は「腕輪」(bracelet) 山との上に棲む神様の名前ということになる。「氷の肩」が正しいか、「腕輪の雪山」の方を探るべきかは、私に決められる問題ではないが、免に角こういう説もあるということを知っておいて頂きたい。私にすれば、これだけ知っただけでも、この本を読んだ値打ちがある。

◇ヒマラヤの地図と地名

スネルグロヴによると、インド測量局で作った地図にある地名は、出鱈目とはいわないまでも、可なり杜撰な調査によるもので、現地では通用しないものも多いらしい。例えば Bimthakothi なども Byemthang だ、意味は「砂の平地」、コーチは「植民部落」であるのだが、実際にはここは、夏季にだけ取引の市が開かれる場所、部落などではない。ラルキヤ・パンジャン (峠) の東側にある Babuk (Larkya) も、七月から十月にかけてだけ市になる場所だといふ。

この峠を東へ越えると、Nupri (西山) の地域に入るが、これはブリ・ガンダキの西侯地方を言い、これの最後(下流)の部落は、

Bartsam(Barcham)で、「国境」という意味である。このヌプ・リは Drang(Deng) までを漠然といふこともある。

序でにいうと、ブリ・ガンダキの東侯を地図には Shiar Khola と書いてあるが、これも皆さんお馴染みの Shar (東) の方が正しいらしい。国境までの地域全体の名称は Tsam である。そしてこの両地域に挟まれた部分を Kuang といい、スネルグロヴもマナスルの山塊を Kuang Himal と呼んでいる。

◇サマ部落を訪つ

さて問題の Sama であるが、これの西藏名は Ra(ro) だ、これはドイツ語のように発音する。スネルグロヴ達がサマについたのは、一九五六年九月七日であるから、領隊の今西、ギャルツェン等がマナスルに登って(五月九日)から四カ月ばかりあとになる。

村長は Shap-Ruk Dewa とい

い、挨拶に行くとき日本隊から貰った砂糖と茶を呉れた。お返しに、大き過ぎたボブリンのシャツを贈った。Tsam の方面へ行ったから、家内が留守番をしているから、自分の家に泊っていいといわれた。サマのお寺を調べていると、村から一人のラマが登って来た。前に Lo Gekar だ、二、三、言葉を変えたことのある人、少しでもこういう関係が前にあると、あとの仕事がスムーズにいく。

このラマについて登ってきたサマの村人達が、ゾロゾロと礼拝堂の中へ入ってきて、ガヤガヤと何かしきりに喋っている。よく聞くと、前にこの辺に来た Gya-mi (外国人) とシェルパ達の悪口である。この場合には、一九五二年から五六年にかけてマナスルに來た日本隊のことであつた。

(注) Gya-mi について。西ネパールでは外国人のことをいうのに二つの言葉がある。一つは Rong-pa (谷の人) という意) で、南の方の谷の人のことで、その方面から來た人のことともいう。第二が Gya-mi 意味は「広々とした場所の人」、これは中央西藏の人、そして昔は特にシナ人を指していた。今日、シナ人のことを Gya-mi Kung-teng といっているのは、昔の国民党に關係がある。西洋人の場合なら正確にいうと Gya-mi rong-pa というべきであらう。

◇サマ部落民の偏見と盲信

彼等はこう云い張っている。ブン・ギエンの神様は、その神域に招かれざる客が入ってきたので大変お怒りになり、疫病を流行らせたり、家畜や羊を、為体の知れない病気で殺したりしたが、これらは皆、日本人のせいである。最も悲惨だったのは、最初のギャ・ミの登山家達が、帰った年の冬に起

ロングスタッフ博士近く

トム・ロングスタッフ博士(イギリス山岳会名誉会員)は六月二十六日スコットランドの自宅で病氣のため永眠した。享年八十九歳。博士は一八七五年一月十五日誕生、オックスフォード大学卒。

一八九四年以来アルプスを登り、一九〇〇年ウェストン師の紹介でアルパイン・クラブ入会、爾來日本に特に関心を寄せた。一九〇五年初めてヒマラヤに入り、一九〇七年六月トリズル(七二〇m)に初登頂、人類最初の七千m峰に成功。一九〇九年カラコルムを探索しシアチェン氷河とテラム・カンリを発見、一九二二年エヴェレスト遠征に参加、一九二八年シアチェン氷河の発見とヒマラヤにおける多年の登山・探検にたいして王立地学協会からゴールド・メダルをおくられた。なおロッキ、スピッツベルゲン、グリーンランドにも足跡を残している。一九三四年王立地学協会副会長、一九四七一九九年ACC会長。一九五六年ACC名誉会員。

著書は This my voyage (邦訳「わが山の生涯」一冊であるが、AJやGJに数多くの寄稿をしている。数年前のACC百年祭の折の元気な面影は「山岳」五十三年挿入の写真に見られる通りだ

った、前代未聞の大雪山と、これによる、ブン・ギエン廟の崩壊である。聖廟は跡方もなく破壊され、そこにいた人達(主に尼さん)が十八人も死んでしまったことである。

スネルグロウは、もしそれが本当なら、怒った神様は何故直接日本人達の上に神罰を加えなかったであろう、とたずねてみると、それはサマの村人は、お寺の共同管理人であるから、見知らぬ外国人を、神域に近づけないようにする責任があった。それをなすがしろにしてしまったから、神様のお怒りがこちに來たのだ、という説明であった。

◆著者スネルグロウの見解

こうした事情が、次の年に日本隊が來た時に、山に近寄ることを頑強にこばんだ理由であったのだが、最後には一応和解が成立して、不屈の日本隊に目的貫徹の機会を与えたという訳である。

だが彼等(日本隊)の成功は、以上のような(後味の悪い)にがさと犠牲の上にかち得られたものであって、私達(スネルグロウ)としては、日本人達が、ああいう事情のもとでは、目標を変えて、他の峰に登った方が一層賢明ではなかったかと思っている。日本人達は、その破壊されたお寺の再建費として、莫大な寄付をしていったにも拘わらず、村人達の気持ちは、以来一向に納まっていなかった。

ということである。

◆日本人は縁なき衆生か

話は山と離れるが、日本は仏教国であり、その教義は西藏におけるよりも一層広く旺んに行われてはいるが、そのことについてこの村人達は、納得していない。というのは、西藏語を喋れない限り、誰も仏教徒だと考えることが出来ないものである。仏教徒だとしても、西藏語を知らないで聖典(彼等は西藏語以外の教典を知らない)を読むことが出来るだろうか、ともいっている。

スネルグロウは一応この主張を受入れる振りをした。というのは、こんなことでいつまでも議論しているのは無益でもあるし、彼等はわれわれを(西藏語を知っているという点で)喜んで、天上の福者(信者)の中に加えていられることを瞭らかにしていたからである。

◆外国人はなぜヒマラヤへ登りに来るのだろう

この群集の中で、独り泰然としていたラマは、あとでスネルグロウに、「一体、外国人達は、何故山に登りにくるんだらう」とたずねた。山の頂上にある寶石を探しにいくなだらうか、それともカトマンズにある政府のお役人から、肩書きでも貰いたがっているだけなのだらうか。

スネルグロウは、出来るだけわかるようにスポーツとしての登山の意義を説明した。(但し解ったかどうかは保証の限りでない)

尚、マルシアンディの源流地帯(Mangbhotは誤り、Nyeshangが正しい)に棲む人達についてもスネルグロウは色々のことを書いてはいるが、この辺は今西錦司その他の人達もじつくり歩いているので、ここではその紹介はやめておく。ただ、ここに行く人は、可なり色んな点に注意しないと、不測の災難に遭わないとも限らないから、(シンガポール、ラングーン、カルカッタ方面への出稼人も多く、山人の純朴さを当てにしていったら飛んでもないことになる)よくよく知っている人から事情をきいて、予じめ充分な対策を樹てておく必要があると思う。

と票 A・C 黒

最近、必要があって、A・ランの「登山の一世紀」という本を読んでいた。一寸面白いことが出ていたのでご紹介しておく(尤も知らなかったのは私だけか)。

A・Cというのは勿論英国の山岳会(一八五七年創立)のことだが、ビクトリア時代(一八三七—一九〇〇)の英国的風潮をその儘むき出しにしている反射鏡でもあったという。一女王の没後はずっとその気風は残っていた。

会的地位など問題にされなかった(A・スミス、T・W・アトキンソン、ウィンパーなどは皆下層の中流階級であった)が、その内に山歴よりも自分の属している社交クラブの威信によって入るものが多くなり、そういう連中が黒票制度を利用して、自分達の嫌いな人間の入会を拒否していた。偏見、狭量、嫉妬がその原因である。

一九三八年までは、委員会が承認した者でも、月例会の出席者全員による秘密投票で、十対一の黒票があれば否決が出来ることになっていた。T・S・ケネディは怒って脱会、パシנגラムははじめから申込みせず、入会は嫌だったが最後に名誉会員になった者もいる。

マメリーも最初E・ダビドソンにケチをつけられ入会出来ず、二度目に入れたがこれはクーリッジが票をごまかしらしい。会長ストラット大佐が止むを得ず票の胡麻化しをやったことも衆知の事実。若しこれをしなかったなら、副会長と委員二人計三人が脱会するところであった。

クロード・シャスターが会長になった時(一九三八年)、会員の選挙は委員会だけに委せるといふことになり、長期に亘る陋習が打破されたが、レイモンド・グリーンがその賛成演説をしている時、反対派の有力者が一人、そのまん前に腰をかけたという。

(Ibidem—98—102) (吉沢)

が、二、三年前からかなり老衰されたことは、去年ロ翁を訪ねた杉野目会員の手紙(会報二二九号掲載)にも見えている。

平素日本の登山界に特別の関心を寄せていたこの大先輩の死に対して、心から哀悼の意を表したい。

(M)

二三三三

くづつ山名の記追加

新版五万分之一久住山が最近出てのを見ると、総称が九重(久住)連山と記入されているが、これにも意見がありそうである。

また星生山(旧九重山とあった個所)が新しく記入されているが、ルビがハはっしよVとなっているのはハはっしよVとすべきである。ちなみに星生の語源は法性である。(橋本三八)

本号目次

- 一 山で会った人(三)
- 二 マナスルの西藏名とサマの人達
- 三 ロングスタッフ翁遊く
- 四 くづつ山名の記追加
- 五 山の信仰と宗教(上)
- 六 二高山岳会と中上川六郎氏
- 七 山の画家・三輪孝さん
- 八 会員通信
- 九 新潟地震
- 一〇 秋田駒周辺
- 一一 台湾便り
- 一二 図書紹介
- 一三 会務報告
- 一四 第六回国立公園大会

山の信仰と宗教(上)

昭和二十五年九月二十一日

— 第一二五回小集會講演 —

故折口信夫述

△はじめに▽

私は若いときからあまり高い山に行つたことがありません。宇奈月温泉から帰つて来るとき、鐘釣温泉までで黒部はよしてしまふような旅行ばかりしております。低い山ばかりめぐつておりますので、高い山はわかりません。当然山の話はできかねますので、山に住んでいた人の話でもしようかと思ひます。これももうわれわれの仲間では常識になっておりまして、一つも珍らしくないので、もしあなた方のうちにもそれだけの程度の知識でも持っていない方があれば、知識の準備として覚えておいていただきたいと思うだけでございます。

△山人(やまびと)考

日本に山人というものがあつた、——おつたかおらないかということはまだ疑問なのですが、おつたらしいあとはたくさんあります。私どもの師匠の柳田国男先生が、「山人考」という本を古い昔に書いておられます。そういう方面での貴重な文献ですから、それをお読みくだされば大体わかるのですが、やっぱり顔が違ふように、少しづつ考えることが弟子と師匠の間で違います。そういう点で幾らかでも聞いておく必要があるかと思ひます。私は国文学者ですから、多少国文学に関係ある話になります。

△山わろ・山んば

山人というものが柳田先生はおつたと言われる、人によるとそんなものはおらないという人もある。「山の中におるのは山の氣だ。里におつた氣違ひが変な精神状態

になつて、山の中に入つて暮らしてゐる、そういう人間ならおれもたぐさん見かけた」——と言ふ人もありました。そんなこともあつたようです。南方熊楠さんという方がそんなことを言われました。実際浅い山に行きますと、ときどきそんな人を見かけます。ところがそういうふうな精神病者——山の氣に打たれて里に帰らなくなつたという人たち——もあるにちがいないのですが、柳田先生の言われるように、かつて実在しておつた、それが今でもどうかすればおるといふような考えも成り立つのです。それと同時に——実際の山人といふものに会つたことはございませんけれども、もう少しほかの種類のものもあるのじゃないかという氣もいたします。あなたの方お歩きになつても、山人というむずかしい言葉は使ひません。たいてい山男、山女子という言葉を使ひまして、非常に平穩にやつております。昔ならば「山んば」とか「山わろ」——わろというのは童のこと、河の中に住んでいるのは「河わろ」、河童です——山におるのは山わろと言ひます。これは名前は「山わろ」というのですが、実は子供といふことではなくて髪の毛を乱していることです。ちやうどそのころの人間は髪を乱しておるから童と言つております。つまり童といふのは、髪の毛を振り乱しておるところから出た言葉であります。

山の中にほとんどの裸で髪の毛を振り乱して徘徊するものがある、そう考へて「山わろ」と言つております。

△山姥(さんば)の伝説

山わろといふのは何か怪物、妖怪のよう考へておられて、近代までその言葉はありました。どうかすればいなかでは今でも使つておるかもしれません。大体において山わろと言ひます。女の方では山んば、山のばあさんといふことで山姥です。ところで山姥といふのはもつと伝説的なもので、非常に美しい方面もあります。足柄山におつた金太郎は、金太郎が一人足柄山におつたのではなくて、それを育てた人がある。それを「山んば」と言うわけ

です。山んばに育てられ、山の氣を受けた英雄がいかにわる坂田の金時で、それは山の中でいかにも美しい乙女が住んでおるといふことを考へておつたのです。考へておるといふことは、實際昔のことですから、里の美しい、そしてけがれのない乙女が山の中で神様に仕えておるといふ、それは實際あつたらしいのです。そしてその「山んば」といふのは、けつしてばあさんではなかつた。山の中に引込んで神様に奉仕している、そういう若い女性のことを言つたらしいのです。それがいつの間にか山のばあ、山のばあさんといふふうになつてしまつて、たいへんこわいものになつた。

謡曲やお能の「山姥」をごらんになりましても、恐ろしい山んばが山から出て来て山めぐりのまね方をいたします。しかしそれは山んばといふものが美しいという考へから、その山んばに会いに行つたのじやなくて、偶然山の中に入つて行き会ふのです。都の遊女で「百魔山姥」といふ舞の上の遊女が、舞の教習を受けたといふので、山んばのいそがしい山を探しに行くといふことになつておられますから、山んばは美しいといふことになつておられます。それがだんだん変化し、育つて行つて、こわい妖怪変化になつた。謡曲の「山姥」にはその二通りの山んばが一ぺんに出て来ているのです。

△山の神に仕える巫女

それで山んばには今日から考えますと、非常に恐ろしい妖怪変化のよう思つていただきます。山の神様に仕えている実在の巫女だといふことになりそうなんです。まあ、あなた方は行かれて登つておられますから、割合不審も持たないでしようけれども、普通の人間にとっては、山の中で乙女が暮らしておるといふば不思議に思われるのでしよう。

日本の宗教は非常に神聖な乙女を選んで、それを一人あるいは数人、海岸とか山の奥のほとんどの人に会うようなこともないところで、淋しい、そして神聖な生活が続けられておる。それで山の神、あるいは海の神に仕えさせるといふふうなことをしておつたことは事実らしいのです。それが少し誇張せられて人身御供の話になる。つまり白羽の矢が里の家の屋根に立つ、するとその家の娘が白木の箱の中に入れられて山の奥に送られる。そこへひととか猿のこわいのが出て来てその乙女を食つてしまふ。

この人身御供といふものは、日本には大體なかつたといつていいのですが、しかしそういう物語のできて来る理由はある。つまりそういう生活を乙女にさせておつたからです。しかしそれは乙女だけがしておつたのじやなくて、わずかの人数の人が里の生活から隔離して山の中で暮らしておる。だから初めは一軒の家族だけが行つてゐるようなことでしようけれども、だんだん家がふえて来まして、後には山の中で村をこしらへることがあるのです。

△山人と仙人と

日本の古い書物には山村(やまむら)といふところがあります。奈良から南東にある村ですが、大和の添上郡山村(やまむら)といふところ。そこへ天子が行かれたといふ話が万

葉集にあります。(万葉集巻二〇)

あしびきの 山に行きけむ 山人の心も
知らず 山人やたれ

これは元正天皇が大和の添上郡の山村に行かれたときの舎人の親王の歌です。つまり支那の神仙思想が入って来まして、山人というのは山に住んでいる尊い人間—仙人—そう考えた。そのために仙人の住んでいる村に行けば自分たちも仙人のようになれる、幸福も増して来るだろうというので、元正天皇は行かれた。しかしその事件は珍しい事件だし、それに考えてみれば話は矛盾しているようなんです。

支那的の考えからいうと、山人、つまり山にいる仙人というものは天子もその資格を持っている。すなわち天子自身がその山人—仙人のようなものである。その天子が何のために山へわざわざ出かけて行ったのかということ。—それに対して天皇の口ずかしたもうたお歌があります。

あしびきの 山行きしかば 山人の われに得しめし山つとぞこれ
つとというものはおみやげのことで、杖をおみやげにもらったのです。—おれが山村へ出かけたときに山人がやって来て、おれにくれた山のみやげがこれだ—

山人の杖をもらって来て祝うということは後の世にもあります。つまり支那の山人ということとは、文字に書きましても仙人となるのです。もっとも平安朝になると、仙人の「仙」と書いて「生仙」と読ましておられます。つまり仏という觀念がわれわれと違うのです。その時分すでにわれわれと違って始終山の中に住んでおるものがあるということを考えて、そういう人間のことを山人という、それと同時に仙人のことも山人という。少くともこの二つの使いわけをしてあった。それでそのやりとりした歌も、やっぱり山人という言葉の持っている

二つの意味と矛盾したりしているのがおもしろくて、そんなことを問答しているのです。

◆山人に二通りの意味

それだから奈良朝ごろは、山人ということとは支那の知識の仙人と、日本人が在来持っている山人という言葉の意義とを同時に感じている。昔の人はそういうふうにかたふしぎに思っているのです。

まだ同じようなことがあるのです。もう一つだけその歌の話をしてみましよう。とこしへに なつふゆ住けや かはごろもあふぎはなたぬ 山にすむ人

(万葉集巻九)

何だか非常にヘンテコな、文学でも何でもない、つくつてみたって何にもならないという感じがする歌ですが、これは仙人の形が何かに描いてあるのか、—土にでも像を彫ってあるのか知りませんが—仙人の姿を見て詠んだ歌です。もうこれは支那の話を近い。先きの歌と今度の歌とを比べると、やっぱり仙人という内容が違っている。ですから少くとも二通りの違った意味に使われておったことは事実です。

◆山人(やまびと)の村

ところが柳田先生の言うように、山人というものが昔から暮らしておって今でもおるといことは、つまり日本では山の中に原住民がおる。その原住民が山の中に住んでおりまして里の人と交通しない。しかしときどき里に出て来る。そのときに人間に姿を見られるのと、ごくわずかな人に接するだけで常には接しない。そういう歴史的な山人があるという考え、それはおるだらうけれども証明することができない。その人間が出て来て、たとえものを言ったところで、おれは原住民の子孫だというわけはないのですからわかりません。しかしどうもそういうふうに見えるものがあるらしいのです。

しいのです。

ところが私どもは山人にはもう一つの形があって、つまり元は里に住んでおったのだけれども、山の神様の信仰を維持するたために山に入ってわずかの家をつくって暮らしておる、それが榮えて小さいながら村のようになつて来た—そういうものが昔からあった。実際宮廷が大和にありました時分に、だんだん奥から平野へと都が出て来るのです。吉野の大和から大和の東の宇陀の平原、それから大和の中部の平原、それから大和の北部の平原に出て来た。そういうふうには宮廷の生活もかわっているのですから、それとともに都の村に相当近いところに山人の村があったのです。その山人といふものがどういうふうにして山の中に暮らしておるようになったかということ、はすべて忘れてしまったから、元から山に住んでおったのだというふうに見えることもできるのです。つまり原住民というふうに見えることもできるのです。

◆神の祭りに奉仕する人々
ところがよく殺風景な考えをすると、そんなに人間はいつまでも古い型を保てないのです。いつの間にかその型を破ってかわった生活をしている、つまり山の中から里に出て来て、里人と一緒に暮らすようになって来るのです。それにどうしても山の生活をなくしてしまうことができないわけがあるのです。

それは日本人の習慣から申しますと、日本人は神の祭りというものをしますから—日本人に限りません、どこの民族でもするのにはあたりまえですけれども—ことにわれわれには非常に印象の強い事実で祭りということをしなければなりません。そのときに昔からその神様と関係のある、その神様に奉仕している人が出て来て祭りをしなければ、神は喜んで祭を受けない。だから祭りのときにはできるだけ神と関係の深い、古い関係を持っているものを使うのです。そうしますと世の中がだんだん進んで行く大勢と矛盾して来る。事実祭りをしようと思っても、昔から祭りをしておった人が亡くなってしまつておるということがある。たいへん痛ましいことだけれども、今日でもまだまだけなかに行きますと特殊な村といふものがありまして、常はその村人は里人から迫害、—迫害まではされませんが—けれども、いやがってつき合わないという苦しい目に合っているのですが、それが一年一べんの祭りの場合には、その村人の人間が出て来ないと祭りができない、そういうところがたくさんあります。特殊な村だと言つて軽蔑し、汚れた者だと言つて自分のそばに寄せつけない人が、祭りのときにはいつでも大事の位置に着くのです。少くとも祭りのおみこしをかつぐのは、あの村の人が出て来なければおみこしが出ないのだということがたくさんあります。

△以下次号につづく▽

△編者付記▽

折口博士(釈道空)が来会されたのは戦後間もなくのことです。お茶の水ルームにはまだ蛍光灯がついていなかった。暗い電灯の下、三十人あまりの会員が集まって、博士の話に熱心に耳を傾けた。司会は東京支部の角田明、川森左智子の両氏で、当夜はこの講演のほかに船越好文氏の八山の写真の撮り方▽があった。

当時方は六十四才で、それから三年の後、昭和二十八年に亡くなられた。この日の講演は専門の速記者の手で記録されたが、原稿のままでも長く保管されていたものである。今回織内信彦、岩佐吉雄両氏のご厚意により、二度に分けて会報に掲載することにした。

なお折口博士の来室について、本会創期会員の一人である柳田国男氏にも講演をお願いする企画があったが、これは実現を見ないでしまった。

二高山岳会と 中上川小六郎氏

横 田 敬 一

前回、会報二二三号と二二六号とに二度にわたって二高山岳会創立当時のことを御紹介したが、一体だれがどのような経緯で二高山岳会をつくったかという最もかんじんな点が明確にされていなかった。その後神田茂氏より二二六号に二高山岳会庶務幹事としてお名前が見えている中上川小六郎氏の御消息を伺い、さっそく中上川氏に会報をお送りしたところ、創立のいきさつについて詳細なお手紙をいただき、長い間疑問であったことが氷解したので、ここに中上川氏のお許しを得て発表したいと思う。以下、V内の文は中上川氏のお手紙から直接引用させていたいたものである。

筆者が二高に入学したのは昭和十二年であって、その前年蔵王山に清溪小屋が建設され、この小屋に木暮理太郎先輩の筆になる清溪小屋の看板が掲げられた。この話が象徴するように昭和の二高山岳部時代の私たちにとっては、山と

いえば蔵王であり、山の先輩といえはまず木暮氏のお名前が浮び、大正時代の二高山岳会を考える際にも私たちは蔵王と木暮氏をその創立に結びつけがちであるが、これはいへんな誤りであった。二二六号記載の拙稿は当時の「山岳」誌上からまとめたもので問題は無いが、二二三号で述べたものは事実とかなり相違していることがわかった。

中上川氏はお手紙の中で「元來二高山岳会の創立は実はず当時所謂『餓鬼大将』の石川欣一君と『餓鬼中將』か『少將』位の小生とで、ガムシヤラにつくったVと述べられている。中上川・石川両氏は高等師範附属中学、二高共に同窓（二高では石川氏は一部英文科、中上川氏は三部乙理科）で仙台下宿先も同じであった。その当時八二高の連中は全部が山に対しては頗る幼稚で、まるきり山の智識など無く、泉ヶ岳に登るのを山登りと思つて居た程度にて蔵王や刈田岳などを天下の高山と思つて人間ばかりなので、日本アルプスの話などしても皆「ホウホウそうかネ」「何と驚きしたや……」と云ふ程度で、ウェストンの名も知らず、小島鳥水の名も知らず、木暮理太郎の名も知らずVというところで、中上川・石川両氏はまず二高生に山とはどんなものか知らせなければお話にならないというので第一回の展覧会、講演会（大正四年）を計画した。

中上川氏は中学二、三年のころちょうど発行された小島氏の「日本アルプス」第一巻によって日本アルプスを知り大いに山に憧れを感じたという。中上川氏の令兄の友人であった今村幸男氏（今村氏も二高の先輩であつて、会報二二三号に記したように沼井鉄太郎氏は大町で偶然今村氏に会い、その縁で大正五年日本山岳会に入会した一筆者注）がそのころ横浜正金銀行に勤めており、中上川氏は当時の思い出として、中村氏は当人の思い出として、今村氏は「アダージリンから見るキッチンジャンガの壮観（当時はクワンチュンジャンガとは云ひませんでした）神々の王座ヒマラヤ連峯のお話も聞いて、あこがれと共にそんな山々もあるのかと驚きと夢でいっぱいでした。又日本山岳会の事務所は当時は横浜の高野鷹蔵氏の自宅にあつたので、小生や石川も直接高野氏と交際する様になり、そこに本場の欧州アルプスに登つて遂にグロースシュレックホルンでアバランシュに会つて好運にも生還された小田原の辻村伊助氏が来られ、我々は日本アルプスから欧州アルプスと夢は一層ひろがりました。エドワードウィンパーのマッターホルン初登頂記など石川と共に暗記する位、読んだものでしたVと述べられた。

中上川・石川両氏はもっぱら日本アルプスの山々を歩き回り、石川氏は百瀬慎太郎氏とよく登り、中上川氏は附属中学後輩の伴野清、大島永明、宮川久雄の諸氏と登った。「山岳」第十年第一号（大正四年）の会員登録山報を見ると、「十八日東京を出て一高の黒木、岩村の両君と共に中房から槍を経て笠岳まで縦走をやりました……（中府にて中上川小六郎）」という文がのっているが、中上川氏のお話ではこれは七月のことと、このとき笠岳で偶然冠松次郎氏に会われたという。同じ第十年第二号の会報には八月四日付で石川欣一氏の名で、七月十六日に友人二人と共に人夫五人を連れて大町を出発し立山、剣を登った後大町に戻り、二十六日には百瀬氏と共に林造を連れて爺から鹿島槍に登ったことが報ぜられている。

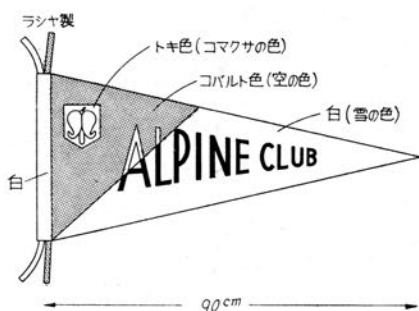
二高山岳会第一回大会は大正四年五月八日九日の両日に催された中上川氏と石川氏は休みに帰京したとき、高野・辻村両氏に講演を依頼し、記念絵葉書の製作を神田神保町の上房屋（カミガタヤ）に注文した。これは上房屋の令息岩瀬一氏が附属中学の同窓であつた関係で、当時上房屋は東京第一の絵葉書屋で三省堂の側、いまの東京堂の筋向いぐらゐの所にあり、銀座にも別店があつた。（第一回大会の展覧会上房屋からドイツ製の三色版の高山植物絵葉書が出品されたことが当時の記録に見えている一筆者注）記念絵葉書は二枚一組で、一枚は会報二二六号に写真がのっている茨木猪之吉画伯の「富士の裾野」であつた。うすい褐色の地色に墨で描かれたもので原画は中上川・石川両氏が茨木画伯を訪問してお願いしたとい

う。他の一枚はコロタイプ版の写真であつて、植村英男氏が幸いにも前記の茨木画伯の絵葉書と共に保存されていたのであるが、会報二二六号で私が絵葉書の枚数について記した際にうっかりしてこの写真のことを書くのを忘れてしまったので、改めて御紹介すると、立山の雄山より剣岳を望む写真で、高野鷹蔵氏の撮影になるものである。この写真も中上川・石川両氏が高野氏宅で種々の山の写真の中から選んだものであつた。絵葉書一組は二十銭で売つたが、当時二高生の霜降りの夏服が一着三円、素人下宿が三食付一カ月五円であつたことを思うと、この二十銭はすいぶん高価であつた。

講演会は八日夜二高講堂（会報二二三号に理科大学講堂と記したのは誤り一筆者注）で行なわれた。実物幻灯器機エビデハスコ（epidiascope）は理科大学から借りたが、六尺ぐらゐもある大きいもので、中上川氏はこれについて次のように述べている。八講演会の前日から二高の講堂にすゑつけたのでしたが、此の機械の上部前面にある反射鏡は表面に直接水銀膜が有り、これにちょっとした触れると銀膜を損傷し機械が駄目になり取り返しのつかぬ事となる故、絶対に触れぬ様に呉々も注意せよと、理科大学から厳重なる申渡しを受けたので、我々としてはそれは大変だ、何としても此の機械を守る可しと云ふ事となり、そこはそれ高等学校生徒の純真且つ

勇敢でしたので、其の夜は石川欣一君と宇野実君が此の機械の番をする事となり兵式体操の時の三八式歩兵銃を持ち出し而も銃に着剣して、まるで聯隊旗でも守る様なあんばいで毛布を持って来て此のエビデハスコープの側に寝て之を守護したと云ふ一幕もありましたV

「山岳」第十年第一号に「鶴二」の筆名でこの大会記事を寄せ



た人について中上川氏は九十九石川欣一氏に間違いはないといっている。「山岳」の原文には「外に張った天幕は、日本山岳会の円錐形の一つ、自分の携帯天幕が一つ」というくだりがあるので、中上川氏にお伺いしたのであるが、石川氏は携帯天幕を持っており、また展覧会に出品されたユングフラウのブロンズの置飾物を見てはしくてしかたがなかったのは石川氏と中上川氏の二人であったとい

う御返事であった。「鶴二」氏は「五月の八日は妙に寒かった、朝早くステーションに講演者たる二氏をおむかへに行く」と書いていたので、高野・辻村両氏は夜行で仙台に來られたものと思われ、その夜は仙台一流の旅館「針久」にお泊めし宿泊料は二高山岳会に負担した。そのほか両氏にお礼として八現金を各々金二十円也と、仙台名産の埋木製の煙草入箱（テールの上に置く）の表に二高山岳会のあるコマクサのマークを彫刻したものVを贈った。

コマクサのマークは会報二二六号の拙稿のカットの写真にあるが、デザインは中上川氏の創作であって、日本アルプスの駒草を思いつてマークにしたというところである。また展覧会場には中上川氏が考案されたペナントを飾ったそうであるが、これは残念ながら保存されていないようである。

（上掲カット参照）

石川・中上川両氏の紹介で大正四年に日本山岳会に入会した宮本璋氏（二高では沼井氏と同期一筆者注）は「山岳」第十一年第一号（大正五年）の会員登録報に「二高山岳会も今年にて中上川、石川の両雄を送り何となく淋しくなりました」という文を寄せている。

中上川氏の御手紙にはこのほか当時の登山ぶりなど記されていてたいへん参考になるが、今回は二高山岳会に關したものとどめて割愛させていただいた。

（一九六四・一・十二）

追悼

山の画家・三輪孝さん

小野 幸

三輪さんを知ったのは昭和十一、二年頃であったから、とにかく古いおつきあいになる。しかし、山の仲間としてのおつきあいをはじめたのはそれから十年もすぎた戦後になってからなのである。戦前は山とも絵とも関係のない仕事のことであったのである。美校を出てすぐに彼は上野の松坂屋の宣伝部に入社していた。その頃の私も学校を出て東京市役所へ入り、つとめ先のそのしごとの関係でそのお店とも往來するようになり、しぜん同君を知ったのであった。その頃は図案とかカットをかいていたが、めずらしいほどまじめ一本の人で、あなたは学校の先生のようですね、と話したこともあったほどである。この時はあなたがいに山のヤの字も話しあわなかったし、あなたがいに山が好きなのも知りあわぬ中に、彼は召集をうけて入隊してしまい、そのまま戦争が終るまでお互いに会う機会はなくてすごしてしまったのである。

戦後、日本山岳画協会（結成昭和十一年三月、本会報第五五号参照）が復活してから、その協会の幹事の山川勇一郎さん（本会々員）

に会ったとき、三輪さんの話が出し、しかもこの協会の世話役をしていてくれるということまでお聞きしたのであった。この協会も彼のようなまじめな人の手にあればほんとうに安心ですね、と言ったのであった。それで彼が山がとてすきであるということを知った。この時から知ることになったのであり、まもなく私もこの協会のおてつだいをしはじめたので、ふたたびのおつきあいとなったのであった。その頃彼はさかんに上高地へ入っていた。毎年何回といつてよいほど徳本峠を越えていたのである。キャンパス、油絵具などふつうの山登りの人には想像のつかない重い荷となるのである。美校のクラスメートの南政善さんはこの頃から彼にしごかれて山が好きになりました、と言われていた。

光風会展には昭和二十八年、二十九年とつづいて「上高地」を出している。剣岳へ行くというので、剣沢の佐伯文蔵君を紹介したのは何年前であつたらう。それから、すっかり剣がすきになって毎年そこに足をほこび、日展や山岳画展、光風会には剣岳の岩と雪深を、あの美しい深紫で発表していた。穂高より剣がよいですね、と話してくれたこともあった。

その頃は、もうりっぱな登山者になっていたのであるが、私は山がすきなだけで、よ、と言うだけで、山のじまも苦しさも口に

したことはなかった。彼が昭和二十一年に一生のしごととして設立した阿佐ヶ谷美術学園はいよいよ隆盛になって行くのに、急になくなられてしまった。私は彼とは一度もいっしょに山には登らなかつたが、山の人を紹介したり、山の話はあるほどしていた。それがせめても、とてもまじめだった三輪さんのなつかしい思い出となるであらう。

三輪さんは明治四十四年一月七日生れ、昭和五年四月東京美術本科油絵科入学、昭和七年特待生に選ばれ、昭和十年三月同校卒業、日本山岳展協会員、光風会員、日本解剖学会員、東京都私立各種学会協合理事などで、著書もデザインに関するもの三つ、作品は昭和九年帝展に初入選以来各種展覧会に入選、個展数回、昭和三十三年の日展には「雪空」が特選となり、委嘱をつづけられていた。会員番号（五四六四）、昭和三十九年一月一日逝去。（三九、六、七）

- ◇ 東京支部三水会
- ◇ 新ルーム披露パーティ
- 八月十九日（水）六時、新ルーム記念品タイタック（本会バッグをデザインしたもの）○ 会費五百円
- ◇ 九月十六日（水）六時
- 二六回小集會
- 大阪市大、ランタンリルン第二次隊報告會
- 講師 鈴木武夫氏
- （八ミリ映面上映）



辰沼 広吉 画

会員通信

新潟地震

 越後支部
藤島 玄

「飯豊山案内」の用件で、沼垂の印刷所にいたらグラグラときた。

泰然自若と云いたいだが、表へ出るには二階にぎしりある活字が危い。裏へ逃げるには勝手不案内心柱に見当をつけておいて五、六人の家族に静かに騒がないでと坐ったままで過したのは立派だが、後で訪れてみて、二坪ばかりの庭にある石灯籠がぶったおれているのに気がつかなかったのが本当である。

静まって表通へ出ると、前の川はあふれるように盛り上り、後の空には帝石の火事の黒煙の柱が空高くたちのぼっていた。地割れ、ふきだす流砂の中、自転車を押したり乗ったり、信濃川の万代橋を渡るのにひどく苦勞した。

家の畳はフワフワ浮き出してい

たし、嫁さんは孫を護り、オカカと二人で荷を二階に移したが、みるみるうちに浸水四尺。徒歩三百歩の海岸線の砂丘の松原へ女共と孫を移し、その夜は彼女等を寝袋へ入れ、終夜焚火をたやさず、何度も腰まで水の家へ往復した。山靴、素裸に赤シャツ、腰に鉈をぶら下げた異様の姿も、さして人目を引かぬほどの騒ぎであった。

新潟市は、万代橋から北の（下流）左右岸は総て濁流（津波でない）にひたされた。築堤して、ポンプ排水で二十三日ごろ地面をみるまで水びたしであったのだ。

職場に出た末娘の豊子が負傷して病院を転々と移されたため四日間も行衛不明であったがそれもケロリと帰ってきた。

電灯はその二・三日前について困ったのは飲料水で、これを運ぶのが唯一の大仕事だ。ほかは何をするにも処置なしで、助けにきてくれた会員と家の内外に流木や家具を積み重ねて島をつくって、水びたしの家の中の物をその上に積み重ねたりした。梯子をかけて、二階から出入してとうとう一日も家を明けずにすまし、ローソクの灯の下で、水をもってきた会員と、酒をよく飲んだもんだ。煮ものは、プロパンガスを使ったが、電話は不通、電報は二十三日、郵便は二十四日に一括配達である。

こんな具合で、一向に無事泰平

のようだが、さて水がひいてから吃驚仰天の有様。水びたしの家具や衣類から畳、戸、障子などゴミの山、泥の海、自衛隊と町内総出の搬出に徹夜がくりかえされ、次は改めてみる家屋の下部の破損である。

外見は瓦一枚落ちないが、土地の隆起、陥没で家の土台は波うっている。災害証明の登録に半壊と記載しても、実際は全壊だということが判明してきたのが大部分であり、私の家など、もっとも被害の少ないほうで、まだ大工一人入れている。秋までに先立つものを目当がつこうから急ぐなどいってすまされる程度であったのは、不幸中の幸である。

水道も一カ月目に家の前に共同栓ができた。それではと、乗鞍岳の国立公園大会に出席したり、明日は飯豊の集いに出向かれるようになった。このようなのに、会員佐藤一栄君があり、他は軽微にすんで、新聞報道の物凄い地震風景とはかなりの距離のあったのが実際であった。

新潟地震につき、県内外の会員ならびに各支部から心からの御見舞状と金品の御郵送をうけた。

越後支部宛のものは委員会に計り、近く開く支部総会において善処する。誠にこれは、困ったことになったと心痛するほどの御厚志の積み重なりで、ただただ一家、在市の支部会員あげての感謝であ

る。紙上をかりて、各位に厚く御礼申し上げます。
七月三十日
敬具

秋田駒周辺

村上 金吾

国見温泉は去年七月には、ひどく混雑していたので、ことしは一月早く出かけていったら、これはまた思ったよりも閑散、磐石からのバスも、乗客は自分一人で勿体なかったし、温泉ではいつものように森山荘に泊ったが、数名の湯治客とタケノコ取の男達が泊っているだけで、とても静かだった。湯はぬるいが、この夏にはボーリングすることになっているという。田沢湖からのバス道路もできて、定期はまだだが、貸切のバスがきいていた。翌朝六時出発、霧はかかっているがますますの天気、横岳、焼砂から近道を男岳に登り、あみだ池におりてから女目（おなめ）岳に登る。五万分地図の駒ヶ岳である。ミヤマキンバ、ミヤマダイコンソウ、チンゲルマ、ヒナザクラ、イワカガミ、シラネアオイなど花盛り、残雪はまだ豊富にあった。

一五八三メートル三角点から湯ノ森、笹森を経たが、時間の関係で千沼ヶ原を敬遠した。鳥帽子岳（乳頭山）を登ってから滝ノ上（たきのかみ）温泉への道をとる。途中残雪のため道が不明に

図書紹介

ヒマラヤの高峰

 第一巻
深田 久 弥著

一九五三年いらい「岳人」に連載されて今日に及んでいる深田さんのヒマラヤ登山に関する記事は、出色のものたるを失わない。今度そのうち一九五六年いらい九十回に上る分に、その後の記録によって手を加えたものが出版された。本巻は「ヒマラヤ概観」についてエヴェレスト、スーリン峰以下アンナプルナ峰にいたる十一峰を含んでいる。全五巻の予定だから、さらにその内容は増加充実されるものと思われる。著者のヒマラヤに対する傾倒と研鑽、その執念と息の長さには驚かされる。しかもいちいち文献に当たって一つも「孫引き」をやらず、その間にみずからヒマラヤの山ふところに分け入って、その靈氣にふれた著者の筆はいきいきとして、いちいちの山群の特長とその登頂の歴史を伝え、登攀者の苦闘や逸話を談って倦むところがない。さらに著者は各篇のはじめに、執筆当時に起ったヒマラヤ関係の話題について、感想や批判を述べている。たぐさんの山群を適当に区分整理して記述したほうが、読者に便利だとも思われるのだが、この記述☆

なり、捜すのにひと苦労した。夕方滝ノ上について滝峽に泊る。ここもわりと閑散だった。滝ノ上はいまのところ交通は不便で、雪石からのバスも上篠ヶ森まで、それから徒歩二時間半を要するとのことだが、そのうち工事の道路ができればバスもはいるそう。

翌日はまた深い霧の中を三ツ石山と大松倉山のおん部を越す。のぼりの道はわるくないが、ネマガリダケのやぶがつづき、霧しずくを浴びるので雨具を出して着た。三ツ石山は前に八幡平から岩手山への途中泊ったこともあるが、かなりいたんでいいる。無人。そこから松川温泉におりる道は手人がゆきとどいていて快適だった。

松川では地熱発電の轟音が谷間にこだまして胆を冷やす。そこからは東八幡平を経て盛岡までのバスも出る。

(三九、六、一八〜二一) 八月の旅から

中村 謙

八月二十日には恵那山と、富士見台、摺古木山に、三十日には一切経、東大嶺へ行ってきました。摺古木山(二二〇〇m)は音に聞く倒木とはなく、快適に登って参りました。

頂上の景色も中央アルプス、乗鞍、御嶽が見えてなかなかよい山でした。

台湾 便り

台湾省体育会山岳協会

余 初雄

貴山岳会報二二一号と「山岳」第五十八年の御惠贈有難うございました。

「山岳」のヒマラヤの登山記や、素晴らしい写真は、毎年のことながら私達には遠い所の夢として胸をおどらせて拝見いたしました。

JAC 関西支部と一緒に参加した「老濃溪紀行」、藤田博氏のほめすぎには一寸くすぐったい感じがします。

また、戦前の台湾山岳会の創立者沼井鉄太郎氏の「台湾山岳未到達の想片」、こちらには貴重な資料です。これ程詳細に述べられているのには全く驚異で、今さらながら大先輩沼井氏の偉大さを感じさせられます。

この本は全員で廻し読みされ、ボロボロになって協会に戻って来ることでしよう。

台湾もだんだん登山熱が盛んになったとは言え、なお人跡未踏の山や、バリエーション・ルートは全省に無数に残っています。

道標のある所と言え、阿里山より玉山へのポピュラーなコースのみで、台北近郊の山にも道しるべがありまじし、中央山脈の山に入るのには警察局で入山手続をし許可を得ねばなりません。一枚十三銭の陸測図がまだまだ活用さ

れています。

登山の装備や携行食の研究もこれからです。そんなわけで幸か不幸か、戦後台湾の山に遭難者はあまりません。

二年前にあなたが御案内して下さった春の北アルプスの登山ブーム、新宿駅のプラットホームを埋めつくしたキスリングの波、スキーの林等はこちらでは全く見る光景です。

去年の貴会報二二七号以後の日本からの来台登山隊の統計は次の五チーム(別表)のみとは淋しいものです。

尚五月に來台した大分県山岳連盟は、二週間の観光ビザで来たので来台が簡単でした。

この外に渡航手続申なのが六チームございまして、去年秋以来の中日外交の低調で中止となっていま

す。

こちらでも貴会より招聘状を頂きましたが、第二次訪日登山隊の出発が出来ず弱っています。

登山に国境はない筈ですが、一日も早く国交が正常化し、共に自由往来出来る様になって欲しいものです。では貴会の御発展を心からお祈りいたします。(六月六日、折井健一あて)

戦後日本チームの來台登山統計 II 1964 年 6 月 現在

来台年月	帰国日	在日台数	チーム名称	隊長	人数	登山地
1963 25/6	6/9	75	信州大学繊維学部	清水 建美	5	T.S.N. ⑧
25/10	26/11	33	JAC 関西支部	三宅 清子	1	U. ⑧
20/12	15/1	26	お茶の水女子大、山岳部	古川 晶子	3	T.S.G.N. ⑧
24/12	19/1	27	明治学院大、山水会	山形 松男	5	U. ⑧
1964 10/5	24/5	15	大分県、山岳連盟	平尾隆三郎	5	T.S.
計		5チーム			19人	

附註：登山地名、T大霸尖山、S雪山、N南湖大山、U玉山、G合歡山、⑧台湾一周

☆方式をとれば執筆順ということになる訳で、それはそれで時代の風潮を窺い知ることが出来て、けっこう面白い構想である。

本書を通読すると、山のようなヒマラヤ文庫に囲まれた「九山山房」主人が、眼を輝かせて聞き入る若い山友に取りまかれ、夜の更けるのも忘れて、心ゆくまでヒマラヤを語り、先駆者をたたえるありさまが眼にうかぶのである。

ヒマラヤ区分図と中央アジア及びネパールの高山々脈図のほか各山群について地図とスケッチならびに参考文献を添え、巻末に高峯表を付してある。極めて良心的で読者に親切であるのはありがたく、これらが、巻頭をかざる写真と共に、著者の親しい友人諸君の手になるものであることは、著者の清福を羨みたくなる。続巻の出版を待望するゆえである。

B6版、本文一九八頁、高峰表一〇頁、写真四葉、雪華社発行、定価四八〇円(日高信六郎)

二三三号訂正

Some Important Unclimbed Peaks in the Himalayas, Karakorum & Hindu Kush (ヒマラヤ、カルコルム、ヒンズー・クン未踏の峰一覽表) 三頁五段 HINDU KUSH の部 Urgend (7037) を削り Trich Mir 東峰 (7692) を加える

・頁五段一〇行目 Mckinley South (9191 m) を Foraker と訂正



辰沼広吉画

まてんらん 竹

臨時理事・評議員会

マ七月二十八日・新ルーム

マ出席者松方会長、三田副会長、理事深田、辰沼、山崎、金坂、松田、折井、武藤、木下、岩佐、川上、村木、監事松本、評議員日高、望月、織内、藤井、石原東京支部長、沼倉、須賀東海支部長、石岡

マ議題と報告

①ルーム移転完了について
・七月十二日に東京支部委員、図書委員会委員、学生部委員有志の協力で移転完了。

・契約、改装工事につき、松本、牧野、青木氏らより格別のご配慮を得た。

②支部長会議開催について
・新ルームも出来たので東京で開催する。時期はオリンピック開催時をはずして考慮すること。

③東海支部ローツェンシャル登山計画承認願について

(a)一九六五年ブレ期の計画につき須賀、石原氏より説明あり、同計画につき早大も計画手続中、この調整は両者間にて決定すべきもので、本会として何れに決定すべき

と云うことはできない。(外貨割当は早大に決定して居り、登山許可については、東海支部がネパールにローヤルティーの一部を払込んでいる。)

早大より在ネパール神原氏にネパール政府の登山許可の様子を至急調査する様に依頼するが、正式許可は何れになるか目下不明である。

東海支部として外貨は別途調達すること、本会としては同計画につき精神的援助は惜しまないことを諒承する。

(b)今後ヒマラヤ登山計画は益々多くなるが外貨申請手続、状況等は会報で周知をはかる必要がある。

④故ガルツェンノルブ長女ニマ来日について

・大阪市大の招待で近日中に来日の予定、本会も賛助することを了承する。

⑤日本、ネパール協会について

・川喜田二郎氏より本会に協力依頼あり、とりあえずオリンピックに來日する同国の接待に関し、オリンピック終了までルームを連絡所として使用了承する。

東京支部会務報告

六月三日(水)役員会

一、第三水曜例会の件
ルームお別れビールパーティ

二、六月十日臨時役員会
ルーム移転について

三、第四回登山技術講習会報告

参加者 三十名

内受講生十六名

出席者

折井、安彦、沼倉、坂倉、芳野、関口、君島、小野、小味、鈴木伊、鈴木郭、富田 十二名

六月十日(水)臨時役員会

一、ルーム移転の件

日程と役務・人員配置を決める。

二十七・八日に荷物輸送完了。

出席者

折井、沼倉、網倉、竹田、松田、芳野、関口、小味、君島、中、鈴木郭、富田 十二名

七月一日(水)役員会

一、ルーム移転の件

七月十二日に決定

二、第三水曜例会の件

七月は移転のため中止とする。

八月十九日(水)より再開。

三、ヨーデルを聞く夕べ

今井嘉道氏邸にて開かれるヨーデルの会は有志会とする。

四、第三水曜会の記録

今まで出席者のみお話を聞いていますが今後はこれを記録として会報に掲載したい。

五、ルーム移転記念品について

出席者

石原、折井、沼倉、芳野、中、関口、君島、鈴木郭、小味、山口、富田 十一名

八月五日(水)役員会

一、八月第三水曜例会の件

新ルーム披露ビールパーティと

する会費五〇〇円

記念品としてタイタック

二、タイタック

頒布価格、三〇〇円

三、お月見とヨーデルの会

九月十九日(土)午後五時より

会員今井嘉道氏邸において

四、九月第三水曜例会の件

ランタンリルン第二次隊報告会

(大阪市立大隊)

出席者

折井、沼倉、関口、鈴木郭、片桐、坂倉、鈴木伊、野萩、小味、君島、富田 十一名

東京支部婦人部報告

一、五月三日〜七日

八甲田山スキー山行

参加者 九名

一、五月十五日〜十九日

第四回登山技術講習会(岳沢)

に婦人部より四名参加あり。

一、六月十一日(木)

(a)夏山における蛋白源及野菜の保存法について 武田育子

(b)八甲田スキー行 報告 富田

(c)婦人部今後のあり方について

(d)七月の集会 二日茶話会

(e)気象(3)基礎編

i 今年の異常気象について

ii 夏山を迎えて前線と台風

出席者 三十一名 富田美知子

一、七月二日(木)

茶話会

☆第六回国立公園大会

今年の国立公園大会は七月二十一、二十二の両日岐阜県平湯温泉のスキー場で行われ、本会からは日高、神谷、村井、藤島玄の諸氏が参加した。

式典は例により固くしるし挨拶づくめに終始したが、野外活動隊は岐阜県山岳連盟理事長の本会員伊藤久行氏が統轄し、日本山岳協会その他従来参加諸団体のほか、日本自然保護協会および地元の緑化促進青年隊、林業研究グループ、山岳遭難救助隊などが加わったのが眼をひいた。

今回厚生大臣表彰者のうちには本会員の佐野勇一、高波吾策両氏のほか尾瀬の自然愛護に努めた群馬県立沼田高校定時制山岳部および六甲を縁にする会があり、岐阜県知事表彰には会員諸君おなじみの松井憲三老ガイドと、乗鞍の自然保護と美化に貢献した旗幟中学校があった。主催者来賓その他参加者の挨拶は何れも国立公園の自然愛護と美化に言及したが、ひとり地元選出の国会議員は西穂高ケーブル架設による山岳の開発を力説した。

来年の国体登山を控えた地元の上宝村は大へんな力の入れようで、全村を挙げて協力した。郷土芸能として披露された鶏斗楽(けいとら)は、一重ヶ根部落に伝わる一種の念仏踊らしいが、服装に異国調を加え、振りに細かいところがあって珍しかった。

夜の野外行事はキャンブファイアイ点火と同時に大雨となり、若人たちはズブぬれになって活躍したが、終るころには雨がやみ、翌朝は晴天の下に一同バスで乗鞍に向い、清湯に当たった。

(S・H)

・日光及八甲田山行のスライド・ハミリ映写

・婦人部今後のあり方について検討する予定のところ時間がなく次の機会となる。

出席者 十八名

八甲田スキー山行

婦人部

二月の日光スキー行に次いで五月三日より七日まで八甲田山に行つて来ました。東京より八名、北海道より一名参加があり総勢九名です。土曜日の混雑をさけて日曜十六時過ぎの寝台車で出発、少々ゼイタクの感あり、青森で北海道の林さんと一緒に酸ヶ湯までバスに乗る。今年は四月のバカ陽気と豪雨とで待望の雪は少なく酸ヶ湯に着くまで気をもませる。営林署の八甲田ロッジに着き、着いて第一日は八甲田大岳迄往復する。山に入れば雪は思ひのほかあつて殆んど雪の上を歩いて行け、降りも道路ぎわまで滑っておりられる。

第二日目、予定通り南八甲田の峯に足をのぼす。雪融けのすぐあとに水芭蕉が見渡す限り咲いて眼を楽しませてくれる。南八甲田は歩くところが多くその割に滑って降るところが少ない。少々うんざりさせられる。

第三日目、三名を残して六名は一足先きに帰路につきバスで奥入瀬溪谷を廻り十和田湖へ、休憩の

後バスで花輪線に出て盛岡へ、皆さんの楽しい思い出をおさめて上野に帰着した。

後に残った三名は翌日ふたたび大岳に遊び同じコースで下山し、途中八幡平でさらに一日遊んで九日の朝上野に到着した。

出発から帰京まで終日晴天続きで展望は欲しいままにされ、春スキーの良さを満喫する事が出来ました。出発に際しては建石さん、岡部さんなど切符のお世話をいただき一同感謝しております。

次回は峠越えのハイキングを予定しておりますので皆様どうぞご参加下さい。

係 富田

学生部報告

昭和三十九年

1月11・13日

スキー懇親会

八方尾根明大山寮 中央黒菱小屋

4月8日 委員会

山岳会ルーム P M六、〇〇

4月15日

昭和三十八年度総会

出席校六十三校

O B 田辺 高橋 芳野 深頼

5月7日 委員会

山岳会ルーム P M六、〇〇

議題

①五月十五日例会の件

②関西岳連との交流

③親睦会

6月二十九日

講演と映画の夕

村木潤次郎・松方三郎氏

山の呼び声・マナスルに立つ

九段会館ホール

会員計報

篠原敏弘氏(会員番号四八三八)

一橋大学山岳部出身、元JAC東京支部委員、昭和三十九年八月六日任地ヨハネスブルグに於て交通事故のため急逝。

「山岳」に対する礼状

アメリカ山岳会のオーバリン氏から「山岳」58年に対し左のような礼状が届いた。

June 19, 1964

Dear Mr. Mochizuki:

I have examined the current issue of *Sangaku* with much interest, and it appears clear that *Sangaku* is rapidly becoming one of the world's most important mountaineering journals.

You are to be complemented on the excellent job you have done in this connection.

Very truly yours,
John C. Oberlin

山岳第59年内容予告

古代の立山について 広瀬 誠
・サイバルの登頂 児島勘次
・トウインズの試登 菰田 快
・シャルプー登頂 豆野征人
・バルトロ・カンリ 渡辺兵力
・ヌンブル登頂 沼田 真
・P二九の東面 木村 裕
・ナラカンカール紀行 安藤久男
・ニューギニア中央高地の旅

・コルディエラ・レアル 加藤泰安
・ヒムルン・ヒマール 金井健二
・カンデ・ヒウンチュル 善行久視
・マム氏の日本訪問 長沢和俊
・近藤茂吉氏の黒部横断 山崎安治
・田部重治氏の新春 山崎安治
・追悼 吉田竹志氏(藤島敏男)・西岡 深田久弥
・雄氏(諏訪多栄蔵・加納一郎)・高木正孝氏(田中薫・田口二郎)・ヒマラヤ登山年譜(続) 田中・馬場

会務報告・英文梗概・写真地図多数
・総頁約三〇〇頁
・編集 望月達夫
・発行予定日 昭和四十年二月
・二三三号おわび
五頁一段に不用のケイの浮出ているものがありました。おわびします。

同頁下欄の通しページ151は517の誤りです。

昭和三十九年八月二十五日発行

東京都渋谷区原宿

一ノ〇四外苑コーポ内

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

価額二十円 電話(〇六)五〇一五

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂